

# 2025年 飯豊山高山帯のチョウ類調査報告

草刈 広一<sup>1)</sup>・齋藤 由季<sup>2)</sup>・工藤 岳<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup>〒999-1201 山形県小国町沼沢185 NPO飯豊朝日を愛する会

<sup>2)</sup>〒999-1345 山形県小国町北115-3 長井山岳会

<sup>3)</sup>〒060-0810 札幌市北区北10条西5丁目 北海道大学地球環境科学研究院

## Field Observations of Butterflies in the Alpine Zone of Mt. Iide, Japan, in 2025

Kouichi KUSAKARI<sup>1)</sup>, Yuki SAITO<sup>2)</sup>, Gaku KUDO<sup>3)</sup>

### はじめに

磐梯朝日国立公園に含まれる飯豊連峰は、東北地方最大の高山生態系を有する地域である。その地理的立地と日本有数の多雪気候により、生物地理学的観点からも大変貴重な高山植生を有している。環境省モニタリングサイト1000高山帯の東北地方のモニタリングサイトとしての登録を現在検討中であり、高山帯における気象観測(図1)、ならびに生態調査が2025年より開始された。その一環として、高山植物の大変重要なポリネーターであるマルハナバチ類(草刈・工藤、投稿中)とともに、チョウ類の調査を行った。今後のモニタリング調査を見据えて、



図1 飯豊山山西側に設置された気象観測ステーション

ルートを設定した定量的なデータの蓄積を目指し実施した。その概要を報告する。

### 方法

チョウ類調査は、飯豊連峰主稜線の御西小屋から本山小屋の区間を主ルートとし、往復路で確認された種のカウントを行った(図2)。2025年は7月11日から9月28日までに行った12日間の調査データについて集計と解析を行った。

調査は登山道に沿ったルート上で観察されたチョウ類の個体数と種組成を記録し、可能な限り写真の撮影を行った。また、昼光性の高山蛾や、昼光性とは限らないもの目撃された蛾類も可能な限り写真で記録した。写真判別が難しい個体については、一部捕獲して確認後、放蝶した(筆者の一人草刈は2025年度までの「ふくしまレッドリスト」の調査で捕獲許可を得ている)。

### 結果

12日間の観察を通して、21種、683頭のチョウ類が記録された(表1)。200頭を超えたのはクジャクチョウ(37%)とベニヒカゲ(30%)で、次に多かったキアゲハ(15%)と合わせると、3種で全体の82%に達した(図3)。ベニヒカゲは飯豊山地で唯一の高山チョウである。今回のトランセクトのルート上には草月平があるが、ここは本種の良好な生息地であり(草刈・長岡, 2021)、主に8月に入って発生



図2 チョウ類調査区間（飯豊連峰主稜線の御西小屋から本山小屋）  
 国土地理院ウェブサイト (<https://maps.gsi.go.jp/>) 地理院タイルを加工して作成

し、8月いっぱい、多くの個体がタカネマツムシソウで吸蜜する。食草はイネ科やカヤツリグサ科の禾本植物であり、草月平では食草となる多くの禾本類が分布している。一方クジャクチョウは、8月になって新成虫が稜線に飛んできて、中旬にはピークに達している（図4、図5-33）。このようなたくさん飛来する現象は少なくとも過去5年間はみられなかった。ヒオドシチョウは今年2頭しか目撃できなかったが、例年はクジャクチョウよりヒオドシチョウの方が多い印象である。イラクサ科植物を食草とするクジャクチョウが、飯豊山地のどのあたりの標高で繁殖しているのか調べる必要がある。渡辺・有松（2025）は、二本松市羽山（山頂の標高は約900m）で2025年8月5日にクジャクチョウが極めて大量発生していることを報告している。飯豊山麓のどこかでも、このような大発生が起きたのだろうか。

3番目に多かったキアゲハについては、これまで種蒔山や宝珠山の下部で幼虫が発見されていた。今回初めて標高1,800mを超える姥権現（図5-18、ハクサンボウフウ）や2,000mの御西岳付近（図5-15～17）で異なる齢の幼虫が相次いで発見された。またオスによるメス

への追尾飛翔が時折観察され（図5-1～4、同一のペア）、春型と考えられる小さなオス（図5-13）が8月13日に観察された。以上の観察記録を総合すると、飯豊山地の稜線でみられる本種の少なくとも一部は、高山帯で発生を繰り返している可能性が高いと考えられる。

御西小屋～本山小屋間のトランセクトルート上ではないが、モンシロチョウが烏帽子岳付近の2,000m地点で観察された（図5-19）。高山帯では初めての確認であり、高山性のアブラナ科植物で発生していないか注目していきたい。一方ヤマトスジグロシロチョウについては、すでに梅花皮小屋（1,850m）の周りでの配偶行動やヤマガラシへの産卵を確認しており（草刈，2020）、2023年8月6日にも、梅花皮小屋直下の石転び沢の1,500m地点の岩場に生えたヤマガラシに産卵したのを確認している。厳しい稜線の環境で越冬できるかは不明であるが、沢の上流で発生した成虫が集まり、一世代を稜線で繁殖する季節高山チョウということが出来る。

モンキチョウ（図5-22）は、個体数はそれほど多くないが、調査期間を通して観察されている。2021年7月1日には烏帽子岳付近（1,990m）でイワオウギに頻繁に産卵するメスを観察しているが（草刈・

表1 調査期間12日間で観察されたチョウ類の種類と個体数

種類	調査期間												種類別合計	
	7/11	7/16	7/27	7/29	7/31	8/9	8/13	8/23	8/26	9/7	9/9	9/28		
1	キアゲハ	3	6	13	34	11	9	15	5	5		4		105
2	ミヤマカラスアゲハ							5						5
3	カラスアゲハ類		1	1	1			1						4
4	ヤマトスジグロシロチョウ		2											2
5	モンキチョウ		1				1		1	4		1		8
6	キタキチョウ											1	1	2
7	ミドリシジミの一種					1								1
8	トラフシジミ		2											2
9	ルリシジミ				1									1
10	アサギマダラ		1		4			1						6
11	ウラギンヒョウモン				3		2	2	1					8
12	オオウラギンスジヒョウモン				1			3						4
13	ミドリヒョウモン				1			1						2
14	ヒョウモンチョウ類				2				1					3
15	クジャクチョウ	4	4	2	6	3	31	180	19	1	1	2		253
16	アカタテハ			1	3	2	4	19	1					30
17	ヒメアカタテハ						1	1						2
18	ヒオドシチョウ											2		2
19	キベリタテハ						1	4		3		8		16
20	ベニヒカゲ					1	39	51	49	51	3	8	1	203
21	ヒメキマダラヒカゲ							1						1
22	ヤマキマダラヒカゲ		2					3						5
23	イチモンジセセリ					1	2	15						18
日付別合計		7	19	17	56	19	90	302	77	64	4	26	2	683

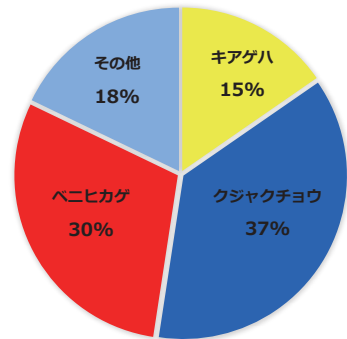
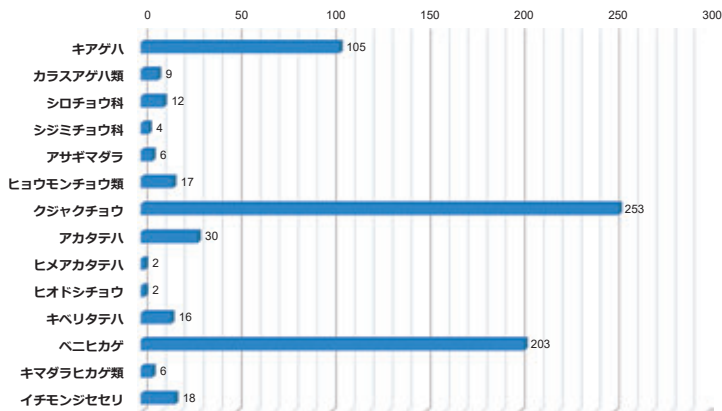


図3 調査期間におけるチョウの種類別累計個体数

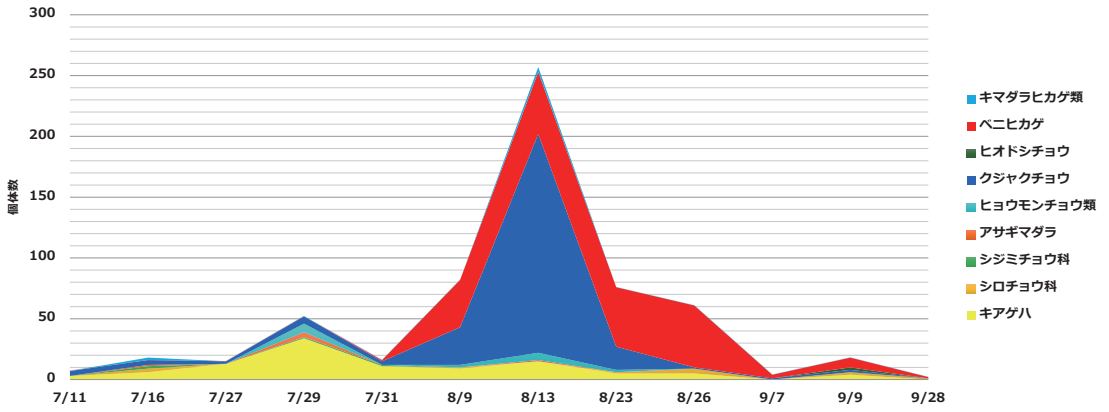


図4 チョウの種類別個体数の日別推移



図5 翅目昆虫の写真  
 1~4 キアゲハ ♂♀追尾飛翔 2025.7.29  
 5~10 キアゲハ 夏型♀ 2025.7.29  
 (No.8は♂の可能性あり)

11~14 キアゲハ 夏型♂ 2025.8.13  
 15~17 キアゲハ 終齢幼虫 2025.8.25 御西岳  
 18 アゲハ 終齢幼虫 2025.8.23 姥権現(1,800m)



19 モンシロチョウ 夏型♀ 2025.8.1 梅花皮小屋  
～御西小屋間  
20 ヤマトスズグロシロチョウ 夏型♂ 2025.9.6  
梅花皮小屋～御西小屋間  
21 ヤマトスズグロシロチョウ 夏型♂ 2025.8.28  
梅花皮小屋～御西小屋間  
22 モンキチョウ ♀ 2025.9.5 タモギ小屋～梅花  
皮小屋間  
23 ミドリシジミの一種 2025.7.13 御西小屋～  
大日岳間  
24 ミドリシジミの一種 2025.7.31  
25 トラフシジミ 夏型 2025.7.13 御西小屋～大  
日岳間  
26 トラフシジミ 夏型 2025.7.16

※図5-1～26について、撮影場所を記していない  
ものは、御西小屋～本山小屋間のトランセクト  
調査で撮影

長岡, 2021), 幼虫はまだ観察できていない。飯豊  
山地が北限のオヤマノエンドウの花にも吸蜜に訪れ  
るが、オヤマノエンドウへの産卵は確認していない。

アサギマダラは夏には中腹でリョウブやウコギ科  
のタカノツメなどを訪れ、稜線ではイワオウギやイ  
ワイチョウ (図5-28), コバイケイソウ (図5-  
29), ハクサンボウフウ (図5-30) でも訪花を確認  
した。稜線の花が少なくなる秋、飯豊山地中腹に局  
所的に生育するタチアザミに複数の本種が執着して  
いるのを確認した (図5-31)。

観察されたミドリシジミの一種 (図5-23～24)  
はジョウザンミドリかエゾミドリと思われるが、日  
照時間が短く気温も低い高山帯の環境では、出現時  
刻による判定に不安を感じる。過去に最高峰の大日  
岳山頂 (2,128m) でもオスを観察しているが (草刈・  
長岡, 2021), 高山帯での2～3例目が2025年に目撃  
された。また、2頭確認したトラフシジミも、これ  
まで飯豊稜線で目撃したことがない種である。

ヒョウモンチョウ類については、2020年までの数年  
間は稜線に多数が飛来していた。草刈 (2021) によ  
る2020年8月の2回の調査では、統計35頭が確認され、  
ウラギンヒョウモンが57%, ミドリヒョウモンが  
31%, オオウラギンスジヒョウモンが11%であった。  
このうちオスはウラギンヒョウモンの2頭のみで、圧  
倒的にメスが多かった。2021年以降は稜線でヒョウ  
モンチョウ類をほとんど観察できない年が続いたが、  
今年になり回復傾向がみられた。トランセクト上だけ  
で17頭のヒョウモンチョウ類が観察され、その割合は  
同定できたものだけでウラギンヒョウモン (図5-33  
右端) 57%, オオウラギンスジヒョウモン (図5-32)  
29%, ミドリヒョウモン (図5-34) 14%と、後者2種  
で順位が入れ替わったものの、ウラギンヒョウモンの  
割合は同じであった。2021年の調査では8月後半の  
ヒョウモンチョウ類のメスの吸蜜植物は、ほぼナンブ  
タカネアザミに限定されていた。産卵のための栄養を  
高山帯のアザミに依存する個体群がいるのかもしれ  
ない。草刈は近年、八島ヶ原 (霧ヶ峰) や烏帽子岳 (湯  
の丸) などで分布を拡大させているツマグロヒョウモ  
ンを観察しているが、飯豊稜線ではまだ見えていない。

ヒメキマダラヒカゲは、稜線の中でもチシマザサ  
の密集地を登山道が横断するような場所でよくみら  
れるが、チシマザサが矮性化した場所や高山草原な  
どの開けた環境でも吸蜜している個体をみかける。  
タカネマツムシソウ (図5-35) やハクサンシャジン、  
コバイケイソウなども訪れる。2022年8月22日には御  
西小屋～大日岳間の稜線 (1,870m) でチシマザサに  
食痕があるのを発見し、裏面に4頭の若齢幼虫を確  
認した。また2025年7月29日には、御西小屋 (2,000m)

脇で、まだ後翅にシワがある羽化直後と思われる個体を確認し、撮影した。本種が高山帯で繁殖していることが明らかとなった。

ヤマキマダラヒカゲは、すでに草刈・高橋 (2020) が飯豊高山帯での繁殖を確認している。8月13日に



図5 (続き)

27~30 アサギマダラ 2025.7.29

31 アサギマダラ 2025.9.26 梶川尾根五郎清水

観察された図5-36のオスも、羽化後それほど経っていないと思われる春型(第1化)の個体であること、黒化と同時に白化も強く、草刈・高橋 (2020) が繁殖を確認したメスと同様な色彩傾向を有していること、などから高山帯で羽化したものと推定される。さらに、羽化後間もないクロヒカゲのメスが2025年8月5日、御西小屋の管理人室内に入り込んでいた。

北海道大雪山では近年の温暖化やそれに伴う乾燥化により、チシマザサの群落が拡大していることが観測されている(工藤・雨谷 2018)。飯豊山地でも古い風景画像と比較することで、チシマザサ群落が拡大していることが認識されている。ヒメキマダラヒカゲ、ヤマキマダラヒカゲ、クロヒカゲのいずれもササ類を食草とする3種は、今後、飯豊の稜線での繁殖や目撃の機会が増加していくものと予想され、注視していきたい。

最後にガ類について、トランセクト調査対象ではないものの、昼光性の種についてなるべく撮影し、画像で同定した。過去にもトランセクトルート上の草月平などで、高山蛾のアルプスギンウワバやホッキョクモンヤガ(図5-39)がしばしば観察され、前翅がほぼ黒化しているホッキョクモンヤガとみられる個体も確認されている(草刈・長岡, 2021)。高山蛾ではないが、近年、クロスキバホウジャク(図



32 オオウラギンスジヒョウモン ♀ 2025.7.29

33 クジャク、アカタテハ、ウラギンヒョウモン 2025.8.13

34 ミドリヒョウモン ♀ 2025.7.29

35 ヒメキマダラヒカゲ 2025.8.1

36 ヤマキマダラヒカゲ 春型♂ 2025.8.13



37 オオタバコガ 2025.8.9

38 クロスキバホウジャク 夏型 2025.7.29

39 ホッキョクモンヤガ 2025.8.9

40 ツメクサガ 2025.8.13

41 ヒロオビオオエダシャク 2025.7.26 御西小屋

5-38) を稜線で目撃する機会が増えてきたが、2025年はさらに多くの本種が確認された。よく目立つので、今後調査対象種に加えていきたい。ほかに2025年はオオタバコガ (図5-37)、ツメクサガ (図5-40)、ヒロオビオオエダシヤク (図5-41) などが稜線で目撃された。

#### まとめ

飯豊山地高山帯において、高山チョウのベニヒカゲの増減やほかのチョウの高山帯への進出や後退などの動向を探るため、御西小屋～本山小屋間にライントランセクトのルートを設定した。2025年はその初年度として、21種 (稜線では23種)、683頭のチョウ類を記録した。このうちベニヒカゲの目撃数は200頭を超え、生息状況は良好とみられる。またクジャクチョウがこれまでになく大量に稜線に飛来した。トランセクトルート以外で、クロヒカゲとモンシロチョウを2025年に稜線で観察した。ルート上のトラフシジミと合わせて、3種が飯豊稜線で初めて目撃された。

#### 謝辞

キアゲハの雌雄、季節型の同定に関して、長岡久人氏の協力を頂いた。本調査は、JST共創の場形成支援プログラムJPMJPF2206の支援を受けたものである。

最後に、著者の一人草刈の高山チョウやヤマキマダラヒカゲなどの生態調査に対し長年ご指導を賜ってきた故・高橋真弓先生にこの場をお借りし心よりご冥福をお祈りいたします。

#### 引用文献

- 草刈広一, 2020. 飯豊山地高山帯におけるヤマトスジグロシロチョウの生態的知見. *Insec TOHOKU*(52): 12-13.
- 草刈広一, 2021. 飯豊山地におけるヒョウモンチョウ類の生態的知見. *越佐昆虫同好会報*(124): 1-9.
- 草刈広一・高橋真弓, 2020. 飯豊山地におけるヤマキマダラヒカゲの生態的知見-付 山形県小国町沼沢における年次変動 (Ⅲ). *越佐昆虫同好会報*(122): 19-25.
- 草刈広一・長岡久人, 2021. 飯豊山地草月平のベニヒカゲ (*Erebia neriene*) の生息環境及び形態について. *出羽のむし*(17): 75-86.
- 草刈広一・芳賀馨・斎藤昌弘, 2023. 飯豊山地の甲虫相—主に2012～2016年度の山形・福島県のレッドリスト調査で確認された種のリストと特徴—. *Insec TOHOKU 特別号*(5): 1-53.
- 工藤岳・雨谷教弘, 2018. 高山帯におけるササの分布拡大メカニズムと生態系への影響. *地球環境*(23): 17-26.
- 渡辺浩・有松淳, 2025. 2025年にクジャクチョウの大量発生を確認. *Insec TOHOKU*(68): 9-10.

#### 付記

ウラギンヒョウモンについてはサトウラギンとヤマウラギンの2種を区別していない。信州大学名誉教授の中村寛志先生には、初稿に有益なコメントを頂いた。